daily life

鸚鵡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄａｉｌｙ ｌｉｆｅ

【Ｎコード】
Ｎ０６１７Ｏ

【作者名】
鸚鵡

【あらすじ】
これは平凡な男である俺、笠鷺三日月＞カササギミツキ＜の物語である。
読んでもらえれば分かるので、重要なことのみ言おう。
その日、俺が変人（友）と話していたら異世界に飛ばされました。

序章

遠い、昔…。

意味もなく、理由もなく。

ただ…願っていたことがあった。

今なら笑い飛ばせてしまう程の、馬鹿馬鹿しいことを。

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

なんて始まる物語あればかなりカッコ良かったが、あいにく俺は普通だ。

普通に両親に愛されて、学校に通いながら友達と時々バカをする毎日。

現在、高校二年。

特に頭がいいわけでもなく、運動神経がいいわけでもない。

まさに、平凡。それ以上でも、それ以下でもない。

俺の１７年間を語るのに一息で事足りる。

つまり、俺の言いたいことはただ一つ。

今日もまたいつもと同じような日常が始まるということだ。

ちなみにここで俺が、いつもと同じ【ような】と表現するには訳があったりする。

ある番組に出ていた奴がこう言っていたからだ。

『世界は常に変わり続ける。変わらないものは、世界が変わり続けるということのみ』

別にその哲学的な言葉に感激したわけでも、心から同意したわけでもなく。

単純にかっこいいと思ったからだ。

誰かに聞かれたら、この台詞を言ってやるといつも待ち構えている。
言う機会などまずないが。
そう、残念なことに未だにこの台詞を言えたことはない。

とまあ、少し話はずれたが俺のことを分かってくれただろう。
いや、大事なことを一つ忘れていた。
俺の名前を名乗っていなかった。

笠鷺　三日月＞カササギ　ミツキ＜。

一応、この物語の主人公であったりする。
そんな俺があの日。
自分の日常を１８０°変えるどころか、もはやねじ曲げ歪ませる日がくるとは思ってもいなかった。
俺には、不本意なことにだが…。

.

第1話　「穴に落ちます」

いつもと変わらないかのように始まった朝。

母親にたたき起こされて、欠伸をかみ殺し家をでる。

「三日月」

肩を叩きながら、俺の名前を呼んだのは親友の大神夕紀という。

名前だけ見れば女の子と思われがちだが、立派な男の子である。

しかも、俺より背が高い。

俺よりも、背が高いのだ。

大事なことなので二回言いました。

「はよー、夕紀ちゃん」

「夕紀ちゃん言うなよー。俺っちってば純粋培養な男子なんですよ」

前の台詞と後ろの台詞の関係性を、誰か解読してください。
１０年以上の付き合いになるが、こいつの思考回路は凡人には理解出来ないようになっている。
長い付き合いで分かったことは、理解出来ない言葉を言われたら無視するべし！

「…今日の帰りゲーセンでも寄ってかね？」

「行く行くー、俺っちやりたい格ゲーがあるんすよ」

「驚愕だ、機械オンチのお前がやりたいゲームがあるなんて」

「ええ！？三日月から誘っておいて、ひょっとして俺っち見学者予定だったの！？これはあれですか、今流行りのデフレーション！」

夕紀の言葉を無視しつつ心の中で舌打ちをする。
機械と名がつくものにとことん弱い夕紀はゲームを始め、携帯やパソコンなど全て使えない。
否、使えないどころか壊す。
そのため、機械がある場所では彫像とかす。
いつもなら俺がピコピコやってる横で見学していたのに。
その夕紀が「やりたい格ゲーがある」なんて、天変地異の前触れと

しか思えない。
なーんて冗談のつもりで思っていたが、まさか本当にあんなことになるとは。

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

机で隠しながら漫画を読んだり、居眠りしながら授業をのりこえた俺は今、朝の約束通り夕紀とゲーセンに向かっていた。

「ねね、俺っち三日月と対戦してみたりしたいかもしんない」

「無駄に文字数の多い言い方にカチンときつつ、その挑戦うけてやる。
負けた奴は、その場で三回まわってワンした後土下座して１０分勝者に罵られることな」

「いやいやいやいや！？？
それってどっちも恥ずかしくないですか！？
やるな三日月、俺っち見直しちゃったぜ」

舐めてもらっては困るな。

ふふふ…そこまで俺は想定していなかっただけだ！

よく考えてみれば、する方もされる方も恥ずかし過ぎるわ。

生憎、罵られて喜ぶドＭな心根も罵って楽しむドＳな心根も持ち合わせていない。

単純に俺が勝つことが当然と思っていたため

【夕紀にこっぱずかしいことをさせる】

に全力をそそぎ過ぎて、自分への被害を考えていなかった。

「やっぱ、さっきの取り消っ……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――！？！？！？」

あれっ？なんで俺落ちちゃってるのかな？

なんか突然足下の地面消えたんですけど。

ブラックホールって地面に出来るものだったっけ？

てかっ、深っ！？

どんだけ落とされてるの俺。

確実にこれだけの高さから落ちれば死ぬよね。

…全身から血の気が引く。

鏡があれば確実に俺は顔面蒼白になっていただろう。

そして、俺の意識は暗転した。

.

第1話　「穴に落ちます」（後書き）

語句説明

▼大神夕紀【オオガミ　ユキ】

主人公の唯一の友。
主人公曰わく、他に脳内に友達が二人いるらしい。

▼純粋培養な男子

女の子と手さえ繋げない、チキンな思春期の男子を指す言葉。

▼デフレーション

通過料が減り、物価が下落する現象。
対）インフレーション

▼土下座

主人公が一番恥じるべき行為と思っている。

そのため、他の人に罰ゲームとしてやらせたがる。

第2話　「知らない人達に囲まれていました」

意識がゆっくりと覚醒していく。

目を閉じていても分かる光量に、寝る前に電気を消し忘れていたかと不思議に思う。

俺の母親は節電に闘志を燃やしており、使わない電気機器のコンセントは抜かなければならないほどに。

必要のない電気を使っていたり、コンセントが差し放しになっていれば【まな板】がとんでくる。

よりにもよって、まな板。

一歩間違えれば凶器になるどころか、もはや凶器である。

目の前で親父がまな板を額に直撃させ、血を流している姿を一度でもみれば電気をつけたままになどしない。

これはもしや、俺はやってしまったのか。

いや、まだ間に合う。

母親が俺を起こしにくる前に電気を消せば。

気合いで瞼を開き、勢い良い起き上がる。

そして……。

「……はぁ？？？」

あいた口が塞がらないとは、この事だろう。

思考回路が停止するとは、この事だろう。

俺、夢の中にまだいるわけ？

何故か巫女の服装をした女の子…甲冑を着た人達が数人に加えて、マントとかつけてる痛い人達もいる。

なんだこの異常電波系なコスプレ集団！！

えっ、なんでみんな「これ、私服ですよ」的に堂々としてるの。

おかしいじゃん！？むしろ、この異常集団からすれば俺がおかしいのか！！

マジで意味が分からん。

すると、何故かずっとだんまりしていた集団から巫女装束の女の子が前に進み出てきた。

「…どちらが、勇者様でしょうか？」

混乱している頭に、さらなる混乱を招く発言をしてくださりやがった巫女さん。

あれっ、「どちらが」って言った??

ゆっくりと首を動かすと、いました右側に。

俺と同じように座りこむ、銀髪黒瞳の日本式の学ランを着込んだ男が。

これはまさに、俺と一緒でなんだかよくわからない事に巻き込まれた奴に違いない。

この状況の答えをそいつが答えられる筈がないが、普通の会話をしたいがために聞いた。

「…なぁ、これって何事？」

そしたら、彼は答えてくれました。

俺の期待を真っ二つに裏切って。

「いわゆる異世界トリップってやつだろ」

「お前も、異常電波系コスプレ集団の仲間かよっ！！！！！」

そう叫び返したのは、仕方がないだろう。

第2話　「知らない人達に囲まれていました」（後書き）

語句説明

▼母親

笠鷺しずな。笠鷺家において最強にして絶対君主。
本編では本名が出る予定がないため書いておいた。

▼まな板

調理道具の一つ。これがあると肉・野菜・魚を切るのが楽になる。
主人公宅では主に躾（シツケ）道具。

▼親父

笠鷺晴彦。職業はサラリーマン。腕っ節は強いが妻にデレデレなだめ、家では駄目夫。

▼トリップ

小旅行。

異世界に行く時点で小旅行の枠を飛び越えていると、主人公よりツッコミ有り。

第3話　「彼との会話」

「いわゆる異世界トリップってやつだろ」

「お前も、異常電波系コスプレ集団の仲間かよっ！！！！！」

叫び出したくなる衝動を抑え、冷静になれと自分に念じる。

現実逃避したくてたまらない。

意識なくして起きたら全部元通り、なんてことにならないだろうか。

「…頭を抱えたくなる気持ちは分かるが、落ち着け。現実を受け入れろ」

思わず叫ぶ。

「この現実が受け入れらるかー！この時点でお前は俺の敵だーっ！

！」

「別に俺はこいつらの仲間じゃない」

「…へっ？」

「あんたも冷静に考えみろよ、目が覚める前に何があったか」

目が覚める前？？

確か……夕紀とゲーセンに向かってて、そしたら突然あいた穴に落ちた。

そうだわ、すっげえ深い穴に落ちたんだった。

そういえば身体はどこも痛くない。

あれだけの高さなら、確実に身体がスクラップか肉塊になっている。

つまり……。

「…深ーい穴に落ちましたが生きてマスネ」

「俺もかなり深い穴に落ちた。で、気がついたらここにいた。明ら

かに日本ではないが今どきあんな格好をするのは演劇・ＴＶやコスプレでのみ。だが、稽古をしている様子やカメラが回っている様子はないし。イベントという感じでもない。つまり、ここはあんな服装を極々普通に着る国だと推測できる。そんな国が地球にあるとは思えないし、あんな深い穴に落ちた筈なのに無傷。イコール、異世界である確率がかなり高い。加えて、あの巫女が言っただろう「勇者はどちらだ」と。これで確信できた、ここにいる奴らによって召還されたんだと。理解したか」

半分以上聞き流しました。

だってこれだけの台詞を無表情で息継ぎもほとんどなしに言いきるから、左の耳から右の耳へ素通り。

もっと間を空けるとか、してくれたらよかったのに。

頼むから、これで理解出来ただろう的な目で見つめてくるな。

言われた言葉の半分も頭の中に残っていないというのに。

「えーっと、つまりお前流の理解力によってここは異世界だと結論づけられたってことだよな」

かなりごまかしました。

あいつがわざわざ説明してくれた意味は無し。

「まとめるとそういうことだ」

良かったんかいっ！？

「…あのぅ……？」

おずおずと巫女さんが話しかけてきた。

あっ、すっかり忘れてました。

.

第3話　「彼との会話」（後書き）

語句説明

▼俺の敵

主人公にとっての敵。
これまで主人公が敵と認識したのは二人のみ。意外と温厚な性格だったりする。

▼イベント

行事。

▼召還

現代的には、派遣した人を呼び戻すという意味。
ファンタジー的には違う場所にいる生物、物をその場に呼び出す。

▼左の耳から右の耳へ

主人公が持つスキルの一つ。
何十文字もの言葉を畳みかけられると自動に発動。
主に授業中の教師の言葉に対し発動される。

第４話　「巫女さんとの会話」

存在をすっかり忘れていた俺は、巫女さんに頭を下げる。

「すいません勝手に話し込んで。…それで、ご用件は？」

「とんでもありません。私ごときに頭を下げられる必要などありません」

なんというか、黒髪美女な巫女さんに丁寧な腰の低い対応をされると凄く気まずい。

俺ごときにそんな対応しないで下さいって、逆に言いたい。

しかし、女子から威圧的な態度しかとられて来なかった俺は嬉しかったりする。

…うん、やっぱり何も言わないでおこう。

「ところで君の名前を聞いても？」

＞ｂｒ＜隊長ー！！抜け駆けです。

抜け駆けが発生しました。
隣の銀髪野郎が俺より先に巫女さんに名前を聞いてます！！
俺が聞きたかったのに。
いつかお前の靴箱に生魚入れといてやるー！

「申し遅れました。私はリシュティアテア国の導きの御子で、ノアと申します。宜しければ、お二人の御名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「俺は、眞螺（シンラ）　黎（レイ）。黎が名前だ」

銀髪はそんなちょっとカッコイイ名前だったのか！？
別に羨ましいなんて思ってませんよ、本当に。

「俺は笠鷺三日月で、三日月が名前」

＞ｂｒ＜「レイ様に、ミツキ様ですね。先程は、私も先走って質問をしてしまい申し訳ありませんでした。
順にご説明させていただきます。まず、ここはレイ様とミツキ様がいた世界とは別の世界です」

うわあー、マジ異世界なんだ。

「ここはリシュティアテア国の王都にあります、召還の祭壇です。長い国の名前ですので、みな【リシュ国】と略称しています。

実は先日から、異常な数の魔物が発生し続けているんです。

その理由を調べた所、……どうやら魔王が復活したらしいのです。

世界の一大事と判断しました私達は、勇者様を召還することを決めました」

真面目に話てくれるノアには申し訳ないのだが。

すっごい、ツッコミたい。

例えば、導きの御子とか魔物って何？とかなんで魔王が復活とかするんだとか。

世界の一大事とかいいつつ、リシュ国しか関わってないのは何でかとか。

でも話の腰をおるのも悪いし。

レイは気にしていないのか、理解しているらしく頷いてるし。

ここで俺が邪魔するのは果てしないよくないだろ。

「ですが本来、勇者様はお一人の筈なんです。
この様なことは初めてでして、勇者様が二人ということなのか…どちらかが巻き込まれただけなのかが判断できないのです」

そんなフラグいらねー！

勇者とかなりたくないし、だが巻き込まれただけなのもムカつくかもしれん。

「一つ聞いてもいいか？」

「何でしょうかレイ様？」

「何か勇者だけが使える力とか、持てる剣とかはないのか」

「あることには…あるのですが、勇者様だけがお使いになられる聖剣が。
ですがその聖剣をおさめている祠は、魅月の夜にしか入れないのです」

「魅月はいつで、何を指すことだ？」

「魅月は空に赤い月がのぼる日のことです。次の魅月は2ヶ月後になります」

不信に思い、それを口にだす。

「勇者にしか使えない聖剣なのに厳重すぎないか」

「確かに勇者様にしか使用できませんが、持ち運ぶことは可能なのです」

持ち運べるって問題あり過ぎだろ。

欠陥品な聖剣かよっ！

その聖剣、いろいろと大丈夫なのか。

「一応お聞きしますが、レイ様とミツキ様はどちらかが勇者様か分かったりしませんか？」

「「こいつが勇者です」」

俺はレイを指し。

レイは俺を指した。

分からないことは沢山あったが、勇者だ何だと面倒な気配でいっぱいだったのでレイに押し付けようと思ったが向こうも同じ考えだったらしい。

こんなとこで、気が合っても嬉しくない。

.

第４話　「巫女さんとの会話」（後書き）

語句説明

▼隊長

主人公の脳内お友達、その１。
おもに、伝えたいことや報告したいことがある際に呼ばれる。

例）
？「隊長に密告してやるーっ！！」
？「聞いて下さい隊長！！」

▼生魚

なまの魚。１日放っておくだけで異臭をはなつ。

▼眞螺（シンラ）　黎（レイ）

無表情で無関心、理解力があり高知能な人柄をイメージして作成。

「黎の方が主人公っぽい」と言われるのが作者のちっさい幸せ。

▼魅月（みげつ）

トリップした世界で、赤い月が昇る日を指す。
実際に月が赤いわけではなく、濃密な魔力が月の周囲に集結し赤く見える。
何故魔力が集結するなど、詳細は不明。

第5話　「猫≠フィリー」

「…らちがあかん。ノア、魅月になるまで二人を勇者候補として城においておいたらどうだ？」

いつの間にか近くに寄っていた騎士？っぽい格好の男がそう言ってきた。

金髪碧眼の２０代前半の優男風。

無駄にカッコイイし、中身ナルシストな変態だったりしないかな。

ええ、ただの僻みですが何か？

「そうですね。ここで結論は出そうにありませんし…お任せしてもよろしいですか、リラ？」

「了解した。おい、ついて来い」

後半は俺達に向かってそう言った。

それで普通について行くレイに驚愕しつつ、俺も後を追う。

何でしょうね、ここでは【説明】だとかいう言葉は存在しないんでしょうかね。

俺の凡脳では理解しきれないことが、立て続けに起こってるんですが。

…もう俺は何もつっこまないもん、クスン。

ノアにリラと呼ばれていた男の案内で外に出るとそこはまさに異端。

面倒なので割愛してたが、今まではでっかい広間に居た。

俺の家が入る程の大きさで大理石らしきものでできており、天井には円形のステンドグラスがあった。

一応言っとくが、笠鷺家は世間一般的な住宅です。

んでもって扉を出た先は中世ヨーロッパ。

吹き抜けの廊下に高さが５ｍはありそうな巨大な柱。

柱の向こうには、ベルサイユ宮殿に似た形の建物が数十棟あった。

そして何故か建物の上に猫の銅像があった。

しかも等身大で、尚且つ座っていたり寝転んだ姿など千差万別。

……沖縄でいうシーサーみたいなものか??

かなり気になるだろこれは。

「あのー、建物の上にある猫の銅像は何の意味があるんでしょう?」

おそるおそる聞くと、睨まれました。

なんか聞いちゃいけないこと聞きましたか俺ー!!

「…猫とは何だ?」

思わずレイの服の裾を引っ張る。

「(ぼそっと)この世界には猫が存在しないのか」

「(ぼそり)猫の名称が違うという可能性が高いとみるが」

なる程、世界が違えば名前も違ってくるものか。

「えっと、あの建物にある生き物の名称を俺達の国では猫というんです。ここでは違う呼び名なんですか？」

「なる程。あれはフィリーだ」

「フィリーはどんな鳴き声で鳴くんだ？」

おいレイ、年上&初対面でタメ口かい。

「ギュイッやキューと鳴くな」

それ、猫の鳴き声じゃなくね？

たぶん、猫＝フィリーではない。

むしろそうでない方が嬉しい。

猫好きな俺としては、ニャーやシャー以外は認めないぜっ！！

「変わった鳴き声だな。ところであんたのことは何て呼べばいい？」
「名乗ってなかったな、俺はリラ・シーズという。リラと呼んでくれて構わん」
「分かった。でリラ、今どこに向かってる？」
「客間がある一番東の棟だ」

淡々と無表情に会話する2人。

俺、こいつら顔面硬直野郎二人と一緒に居るのやかも。
顔を合わせてから一度もニコリともニヤリともしない。
あんまりシリアスなのは得意じゃない。
どっちか冗談位交えて話しをしてくれ。
ここは俺が頑張ってみるべきか…。

「しかし、レイちゃんもリラちゃんも綺麗な顔してるよねー」
「……」

「……」

はい、すべった。

お二人の視線がグサッときて痛いです。

てか、どっちかつっこむとかボケるとかしてくれ。

俺が恥ずかし過ぎるわ！

ただ今、感情豊かな方募集中。

お問い合わせは、ミツキまで。

隊長、一人ボケ・ツッコミは切ないです。

.

第5話　「猫≠フィリー」（後書き）

語句説明

▼ベルサイユ宮殿に似た建物

作者は文章能力が低いため、宮殿を表現出来ず上記の表記となった。

▼フィリー

猫にそっくりな生き物。鳴き声は「ギュイッ」や「キュー」と鳴く。

神の御使いとして崇めたてられており、無病息災を願う象徴。

▼リラ・シーズ

リシュ国の王室護衛筆頭騎士。

現在は勇者の護衛及び、剣術指導の任にあたっている。

▼シリアス

真剣・まじめ・深刻。

主人公はシリアスな空気が苦手なため場を和まそうとするが、毎回失敗している。

第6話　「生きていく世界」

この世界にメガネは存在するのだろうか？

存在するなら是非、是非とも目の前で教鞭を執っているノアにかけて欲しい。

メガネは赤い縁のフレームで。

女の子に自分の趣味を押し付けてしまうのは世の男の性（サガ）だと思う。

いえすいません調子こきました、ただの俺の性です。

せっかくなので巫女服ではなくスーツ、もしくは白衣でお願いしたい。

授業内容は保健体育。

そんでもって、うふふのあははな展開に――――。

「……あのう、ミツキ様。私の話は聞いておられますか？」

はっと我にかえると、ノアが話すのを止めこちらを見つめていた。

やべっ、妄想に集中して聞いてなかったー！！

本日は、異世界に来て二日目。

昨日は突然の召還やら勇者云々で疲れたため、リラに部屋に案内された後はすぐさま就寝。

そして今日は、ノアよりこの世界について常識やらなんやらを学ぶことになっていたのだが…。

隣のレイから呆れたようなため息をはかれた。

ノアに対して、なんて失礼なことをしてるんだ俺。

こっこれは、

一，謝る

二，土下座して謝る

三，ノアの素晴らしさを褒め称えながら謝る

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「すいませんでしたーっ！！」

引かれても嫌なので、妥当に「一，謝る」にしました。

「では、始めから説明しますね」

朗らかに微笑んで言われ、感動してしまう。

なんて優しいんだ、ノアが女神に見えます。

今度こそ聞き逃すことのないように、集中する。

「この世界の名はエルディス。

このエルディスでは、人族・魔族・竜族・魚人族・奇蹟種の５つの種族が存在しています。

人族と奇蹟種が、＞リシュ国＜に。

魔族が、＞夜の国＜に。

竜族が、＞メサイガ地区＜に。

魚人族が、＞海碧領域＜にそれぞれ暮らしています。

一応それぞれ交流はあるのですが、５つの種族が共存している土地は今のところはありません」

「聞きたいことがいくつかあるんだけど良い？」

この世界、ノアによるとエルディスという世界に来て二日。

聞きたいことがあれば自分から聞くべし、と悟りました。

じゃないと流されてしまうから。

レイは頼りにならないし。

「何でも聞いて下さいミツキ様」

「きせきしゅってどんな種族なんだ？」

「ある一点を除きますと、人族となんら変わりありません。ですが、その一点で人族とは決定的に違うと言えます」

何だか分からないが何か凄そうな種族な気がしてきた。

摩訶不思議な能力があったり、背中に翼とかあったりとか。

貧相な想像力しか持ち合わせていない俺には、これ以上の想像は不可能である。

＞ｂｒ＜「で、その一点が奇蹟的なものだから奇蹟種と呼ばれるのか？」

「その通りですレイ様」

一度でいいからレイの頭の中を覗いてみたい。

つか、グチャグチャにしてやりたい。

なんでそんな頭いいんだコノヤロウ。

「その一点というのは……尻尾がはえているんです」

「「……」」

沈黙が流れる。

「…どんな尻尾がついてるんだ？」

そこーっ！？！？

おかしくないかレイ、気にする所を激しく間違ってると思います。

「フィリーの尻尾です」

「うえええ！？フィリーってよく屋根にのこってるフィリー？」

「文法が破綻してるぞミツキ」

「一般ピープルでは普通の反応じゃい」

フィリーだぞフィリー。

つまり、猫の尻尾が人についているだぞ。

「神の御使いと言われますフィリーの尻尾を賜る、これほどの奇蹟はありませんから。リシュ国では奇蹟種の方は敬われ、優遇されています」

「その尻尾には何か能力があったりしないのか」

「いえ、何もありませんがどうかなさいましたか」

「そうか、いや悪かった」

何か文句でもあるのかと言わんばかりのノアの瞳に、流石のレイも押される。

若干空気が微妙になってきたので、話を変えよう。

「あのさ、ノア。

それぞれの種族が住んでいる所の名称が国だったり、地区だったり領域だったりするのはなんでなんだ？
後、魔族がいる夜の国って正式な国の名なのか？」

「そのことにつきましては、まず前提として知っていただくことがあります。
確かに多種族とは交流はありますが、それはあくまで商人や個人レベルのもので。
国家にかかわる重鎮同士で付き合いは、ほぼ皆無です。
つまり、各々が好き勝手に付けた結果なんです。
それと、夜の国についてですが間違いなく正式な名です」

どうやらエルディスの種族間事情は一筋縄ではいかないらしい。
先程のノアの説明ではおかしな部分がある。
まぁ、それを言えないからこそごまかしたんだろうが。
レイなら色々と俺が見えないところも見えてそうだが。
とりあえず、ここは納得したフリをするのが一番だろう。

「ありがとうノア。質問は以上だから」

「ミツキ様とレイ様にこの世界についてお教えするのも、私の役割ですので。何かご質問があればなんなりとお聞き下さい。

次に導きの御子について説明いたしますね」

導きの御子、つまりノアについてだ。

「導きの御子はリシュ国のみに存在する特殊な職種です。

２０歳以下の未婚の女性であることが絶対の条件で、導きの御子はただ一人ですが候補でしたら５０以上います。

御子の役割はリシュティアテア様の伴侶となり、勇者様を導くことです」

「リシュティアテアはこの国でいう神か」

「そうとらえてくださって構いません」

「実在するのか、もしくは偶像か」

「私は直接お目にかかってはいませんが、実在されています。過去にリシュティアテア様とお会いした御子もおりますので」

二人に会話にギリギリついていけるだけの俺には、とてもじゃないが口を挟めない。

まあ、ノアは神様らしき奴と結婚してるらしい。

ノアは相手と直面したことはないみたいだけど。

「ほう、であんたは勇者をどこに導く？」

今までより真剣で低いレイの声音に俺まで緊張する。

「夜の国の王、魔族を統べる“魔王”のもとへです」

「魔王を倒せと？」

「はい」

「…今まで勇者と呼ばれた者は全員、魔王を倒してきたのか」

「…えぇ……まぁ……何人かは役目をまっとう出来ませんでしたが」

いやいや、目をそらしながら何をおっしゃってますのノアさん。

それって何人かの勇者はぽっくりいってますよね。

俺に死亡フラグが立ちました。

.

第6話　「生きていく世界」（後書き）

語句説明

▼性（サガ）

生まれつきの性質。

▼うふふのあははな展開

他人に言えないような18禁的なあれこれ。
主人公の桃色に満ちた妄想を現す表現。

▼エルディス

主人公が召還された世界の名称。

▼死亡フラグ

近い未来、生命の危機におかされる。
主人公は必死でフラグを折ろうとするが、折れそうな気配は見えない。

第7話　「生きていかなければならない世界」

「ごほんっ。ですから、勇者様には魔王を倒せる力をつけていただかなければなりません」

視線は明後日の方向のまま、声だけは毅然とノアが言う。

「そこで、まずはお二人の魔力を測定したいと思いますが…。魔法や魔力についてはご存知でしょうか？」

「どういうものかなら分かるが、理論は知らないな」

「摩訶不思議現象」

上がレイで、下が俺。

うわあ、俺の回答お馬鹿さが匂いたってるぜ。

「では魔法と魔力について先にご説明しますね。

魔力は世界に干渉する力、魔法は書き換えられた一時的な律法のことを指します。」

＞ｂｒ＜なんか俺の知ってる魔法事情とかなり違うんですけどーっ！

どうなってるだエルディスさんよ。

世界に問いかけて答えが返ってくるわけないが。

「人は誰しも魔力をもちますが、全ての人が魔法を使えるわけではありません。

世界に干渉出来る一定以上の魔力が必要です。

リシュ国のおよそ3分の一の者がそこにあてはまります。

ですが…メイザス＞魔法使い＜としての力を持つものは１００人に一人、ウィザード＞魔導師＜になると１０００人に一人いるかどうかと言われています。

メイザスは、既存する魔法しか使用できない者。

ウィザードは、新たに魔法を作成・研究をする者です。」

メイザスは凄い奴で、ウィザードはもっと凄い奴らしい。

つまり、ただ使うだけか応用や新たに創作できるかの違いだと思う。

凄いな自分、理解できちゃってる。

俺の頭はもう少しでパーッンなりそうだぜい。

だが無情にもノアの説明は続く。

「次に魔法が発動する理論について詳しく説明しますね。
先程言いました通り、魔力によって世界に干渉をします。

世界には決められた規則、決定付けられた【律法】が存在します。
律法がある限り、何もないところから突然何かがあらわれたり・重い物が浮いたりするということはありません。
＞ｂｒ＜絶対的な法則と言った方がよろしいでしょうか。
＞ｂｒ＜魔力で律法に干渉すると、律法に波紋が生まれ律法が歪みます。
その上から術者が律法を定めることで魔法となるのです。

例えるなら、池に石を投げ入れるという行為が近いですね。
池に石を投げ入れると、石を中心に波紋が生まれ池にうつっていた光景が歪みます。
ですが少しすれば元に戻りますよね。

つまり、魔力で一時的に世界の律法を無力化しその上から律法を定め魔法を放ちます。
ですが魔力を込めるのを止めれば、無力化されていた律法が効力をあらわします。

ご理解いただけましたか？」

意識が飛びそうでした。

頑張って、頑張ってノアの話に耳を傾けていたけど…。

小難しい話って苦手なんです。

俺の国語的な能力は低いのよー。

「おおまかにか理解できた。実際に視認してみたいな」

「後でお見せしますよレイ様」

「頼む」

微かだが、少し嬉しそうに感じる。

レイだけでなく、俺も魔法は見てみたいし楽しみではある。

「では早速お二人の魔力を測定させていただきますね」

あれっ?、俺はスルーですかノアさん。

一度とて理解しているの一言は言ってませんが。

まっいっか。

人生ポジティブに生きないとね。

そこへ、直径３０ｃｍはありそうな透明の球体をもったリラがあらわれた。

あんた今まで何処にいたんだよ。

しかも現れるタイミング良すぎだし、もしやあれか忍者のごとく天井に控えていたのか。

侮りがたし、リラ・シーズ。

「ありがとうございますリラ。これは魔力を測定する魔道具です。手のひらで触れていただければ大丈夫ですので」

「なら、俺から触れるぞ」

ちょっとまちなはれー、レイ！

文句を口に出す暇もなく、レイが球体に触れてしまう。

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

そして、球体が砕けた。

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

砕けた…。

>br<>br<>br<

砕けました。

>br<>br<>br<

「砕けたな」

「「「……っ！？！？」」」

俺とノアとリラ絶句。

なんで砕けるんだ、もしかして測定不可能とか？？

「俺が知るかぎり、この魔道具が壊れるのは初めてだ」
「いえリラ、私が知るかぎりでも初めてです」
「どの位の魔力があればこうなるんだノア？」
「すいません私にも想像がつきません。ですが高位術師の１０倍以上の魔力はあると思います」
「勇者に選ばれるだけはあるということか」

レイは並みの人間じゃ持たないほどの魔力を保有しているみたいだ。
これはもうレイが勇者で間違いないだろ。
おお、俺の死亡フラグが折れるぜっ！
まぁ、平凡な俺が勇者みたいな英雄に選ばれるわけがないけど。

「リラ、新しい魔道具を持ってきてもらえますか」
「えっ！？俺も魔力測るのか。もう必要なくない」
「まだレイ様が勇者と決まったわけではありませんから」

現実みようよノア。

決まったってるよ、明らかに決まってるよ。

「持ってきたぞ」

「ありがとうございます。ではミツキ様、手のひらで触れて下さい」

嫌々ながらも、球体に触れると何も起こらなかった。

うん？これは、反応無しだな。

「えっと、これはどういう状況？」

「……ありえません」

何が？

なんで未知の生物にあったような目でこっちを見るんですか。

「…魔力が……魔力がないだなんて。一体何者なんですかミツキ様は」

どうやら人なら必ず持っている魔力が、俺には全くないらしい。

どないなってんねん！？

えっえっえー！？

俺って何者なんですかね。

.

第7話　「生きていかなければならない世界」（後書き）

語句説明

▼摩訶不思議（まかふしぎ）

きわめて不思議。
例をあげるなら魔法・ＵＦＯ・女心など。

▼律法（りっぽう）

戒律・規則・法律を指す。
エルディスでは、世界に張り巡らされた規律（おきて）のようなもの。

▼メイザス（魔法使い）

すでに存在する既存の魔法を使用する術者のこと。
術者の大半がこれにあてはまる。

▼ウィザード（魔導師）

魔法の解析や研究、既存の魔法を応用した魔法の開発なども行う術者のこと。
自分だけの魔法を使用する。
数が少ない。ウィザード＝高位術者。

.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0617o/

daily life

2011年1月25日03時00分発行